60歳代

音楽と青春

大嶋郁子さん

今年の五月末に、小金井市の宮地楽器ホール内の大ホールでの、チャリティコンサートで、四名の女性演奏家、プリマヴェーラ弦楽四重奏団の演奏を開いた。ラヴェルの作品だった。女性ならではの音調と司会を楽しんだ。小金井に住む様になって市民交流センターが建設されて大いに喜んだ次第である。おそらく多くの市民がそうであろう。

名古屋で、学校を卒業して以来、勤めが終わると、帰りに労音組織の知人と連絡を取り合って演奏会へでかけたものである。ショパン演奏で有名な中村紘子さんのコンサートにはかかさず聞きに行ったりした。今でも演奏活動をしておいでになるのは心強い。また、職場でドイツ語のできる人達が、元東ドイツのゲバントハウス管弦楽団のメンバーが来日した際、小ホールに招いて、フルートを含めて四重奏の演奏会を持った際には、末席乍ら、お手伝いをして、知人が知人を呼び、大盛況だったのは、今でもなつかしい思い出である。音楽は心の糧である。誰しも楽しみ、いやされている。私にとって、青春とは、二〇歳で誕生日プレゼントにオーケストラの切符をプレゼントされたのを皮切りに、色々のジャンルの音楽を聞きに出かけた事の思い出である。それは今も続いている。小金井市でも、少しづつ少しづつ音楽好きの友人ができてきている。今後も楽しみにしている。

70歳代

60年前の音と電波と自分に

本木隆さん

真空管が、ST管だけからGT管、MT管、サブミニチュア管が登場、音楽を聴く環境が高忠実度、hifi（ハイファイ）の時代が私の青春時代と重なる。その頃に、ラジオの選局同調すると、発光部の形が変化し目で見て出来る様になった。同調指示管マジックアイ、暗い所で見る蛍光グリーンの光は、なかなか魅力の色だった。出力管も大出力がでるGT管、プリアンプには低雑音の5極管を使って自作でも素晴らしい音を楽しめた。シャーシとなるアルミ製を秋葉原まで持って行き、好みの色に塗装して貰い、大満足で帰ってきたものです。

レコードを聴くのは、hifiじゃなくちゃ、はごく普通なことばになって、スピーカーも、高音専用をツイーターと、中音専用をスコーカー、低音専用をウーハーと、音質が良いだけ値段も学生には手が届かなかった。そこで弟と、春、夏、冬休み親の店の手伝いをしてやっと手にした嬉しさは、今も忘れない。

当時、低音を出すには大きなスピーカーにBOX、市販の物は高価だったので、知り合いの大工さんに作って貰った。この時代は、メーカー品にも負けない、アマチュアの世界が有った様に思う。

或年、小学生の頃、横浜で観た隣室からの有線テレビジョン以来、電波受信の実物に、これからの時代を思った。或日、夜通しかかって作ったテレビのテストパタンに感動、家族を起こしてしまった。思い出多い私の青春の日々でした。

60歳代

「青春18歌旅号」へのご招待

福田久治さん

私は旅やエッセイそして音楽など多数の趣味を持っています。最近、「歌う会」やボランティアとして市民イベントや高齢者施設等で歌うことがありますが、それぞれの時代の「青春の歌」がコミュニケーションに役立ってます。気持ちだけでなく、肉体をも活性化する効果があるようです。

「歌う会」では、「昭和を中心に平成までの『歌の旅』をご一緒に」というコンセプトで、「美しい、やさしい、そして力強い」数々の青春の名曲（抒情歌、ポップス等）を歌っています。そこで最近の発表会をもとに、特別臨時列車「青春18歌旅号」を編成してみました。さあ！ご一緒に、元気に、楽しく。〝出発進行～〟です。まずは、(1)昭和初期～1950（昭和25）年代の風景が車窓に流れてきました：丘を越えて・青い山脈（唄　藤山一郎）、あざみの唄（唄　伊藤久雄）。次に（2）1960（昭和35）年代は高度成長期。オリンピック開催：若者たち（唄　ザ・ブロードサイド・フォー）、世界は二人のために（唄　佐良直美）。さらに元気に、（3）1970・1980年代が輝いています：なごり雪（唄　かぐや姫、イルカ）、昴－すばる－（唄　谷村新司）、川の流れのように（唄　美空ひばり）。（4）1990年代はバブルが崩壊。いよいよ、（5）2000年～現在。力強い復活の歌：麦の唄（唄　中島みゆきNHK「マッサン」の主題歌）。ご存知でしたか、「青春18きっぷ」は年齢に関係なく誰でも買えます。何回でも途中下車できます。あなたの青春に乾杯!!!

60歳代

苦しい時代（青春）を超えて

傳田幸一さん

母子家庭であった。夢もなく複数の仕事をした。アトピーと重病ぜん息で仕事はつづかなかった。母の化粧品のついたおにぎりがまずかった。母が出かけると一人っ子の為、おばあちゃんが家庭をやり私を育てた。貧しさとはこんなことと思った。阿佐ヶ谷で間貧し業をしていた。ねずみが天井をはうせいかつでアトピーやぜん息にはよくなかった。のぞみは、高学歴をつけ公務員になりたかった。とにかく勉強した。小中に余り学校に行ってない私は、労力はだめ、息を吸うとぜんめいがした。高校ぐらいかからがぜんよくなり、高校は成績優秀であった。ぜん息も治まり御茶ノ水で教師になる本を毎日さがした。埼玉、群馬、北海道日高地方、千葉と片っぱしから教員採用試験を受験し、やっと都庁に入都した。あれから45年、学んだことは役立っている。三流大の私は必死で勉強した。何のコネも親や父も教員ではなく必死であった。とにかく必死で勉強し調べた。2、3の中小企業に入ったが夢はかなわなかった。2、3年しやっとお呼びがかかった。12月、辞められますかと当時の若きエリートは言った。私学共済につとめていた私は、いよいよ花の都庁二庁舎で辞令をもらった。入都式もやり七月には浅草高校にいた。夢は努力すれば叶う。その間不足分を東洋大学通信でとった。もう45年前の話である。青春の夢は必ず叶う。

70歳代

少年時代からの夢を追う今が青春時代

平野武さん

「桃栗3年、柿8年、私の人生90年」をモットーに双子の孫娘が成人式を迎えるまでのこれから20年を元気で過ごそうと、毎日忙しく動き回っている。70年間の人生で一番楽しく充実している今が私の青春時代である。

少年時代からの夢で実現出来なかった仕事と習い事が、3年前サラリーマンリタイアー後一気に花開いた。仕事は①桜町病院の受付案内ボランティア②シルバー人材センターの広報配布③つきみの園の訪問介護ヘルパー。習い事は①陶芸②マンドリン③コーラス④絵手紙⑤社交ダンス⑥シルバー大学。スポーツは①テニス②水泳③ラジオ体操。とりわけヘルパーの仕事は、週3日間で7名の方々のお世話を給料を頂いて勉強している。ボランティアもヘルパーの仕事も10年後、20年後の自分の姿を見ているようである。「Aさんのように自分でお風呂に入れるような80歳になりたい」「Bさんのように認知症にはなりたくない」と思いながら毎日が勉強である。

家の中で終日過ごすよりも、いろんな場所で多くの人と接し、一方で規則正しい食生活と十分な睡眠時間を心がけている。

いつまでも元気で、明るく楽しくそしてやさしく生きるために70代の青春時代を謳歌している私である。

10歳代

第一次青春期

木村美月さん

「青春とは何ですか」と聞かれたら、私は「部活です」と答える。

私は今中学三年生で、バレーをやっていた。ついこの間の引退試合で予選で負けた。すごく悔しかった。その日初めてこのメンバーでもっとバレーをしたいと思えた。今考えればとても不思議な話だ。なぜかと言うと私達三年の代は、あまり仲が良くなかったため、ぶつかり合ったり、試合中険悪ムードになることも多かった。そんな時には心底バレー部が嫌いになったけれど、次の日部活に出るとそんなのはすっかり忘れることができた。その時私は、なんだかんだ言ってもバレーが好きってことには変わらないということに気付いた。私達は恵まれていたと思う。良い後輩をもち、後輩には沢山迷惑をかけたけれど、それでもついてきてくれて、三年になって引退するまでの3ケ月程とても楽しんで部活ができた。後輩達や先生など引退試合まで私達を応援してきてくれた人が居たからこそ、私達は最後の試合でとても良いプレーができたんだと思う。本当にこのチームでバレーができて良かった。応援してくれたすべての人に感謝している。

私は青春とは、その時に一生懸命頑張ったことだと思う。青春はとても幅が広いから、一人一人違うと思う。そして青春は一つではなくてこの先も続いていくと思うので、この先の未来も期待して生きて行きたい。

70歳代

50代のおそ咲きの青春

宮原千惠さん

私は難病で生まれおくれて育ったので、若い頃は、苦しみの時代であった。青春とあえて言うならば、韓国語を勉強した事である。初めは、川崎市の市役所のサークルからスタート。韓国語の手紙や、唄をうたうのが大好きな私であった。その後狛江市の韓国語同好会へ行く事になった。今迄のメンバーの中心者がそこへ行っていて、誘われたのである。東京で一番大きな、同好会であった。副会長さんは、ある有名な歌手の弟さんであり、会長さんは、お医者さんをしていた。この同好会で私は、韓国語の作詞に挑戦。韓国と日本の友情を、ひまわりに見たてた。副会長さんが、良い唄があれば作曲するよと、言ってくれた。それで私は、良いかどうかわからないけれど、作りましたと詞を渡した。ちょうど夏休みが始まる頃の事。休みが終わった頃に作ってくれるのではと思っていた。が、すぐに作って送ってくれたので、びっくりした。こうして「ヘバラギ（ひまわり）」という唄が誕生したのである。

又、会長さんが、楽しそうに学んでいる私を見た為か、韓国語の弁論大会に出る事を、すすめてくれたのである。初めは原稿を読んでも良いと思っていた。ところが、見たら減点されるという事がわかった。しかし嬉しかったので、けんめいに覚えた。ちなみに50代で出場したのは、私だけであった。入賞はできなかったが、これも、おそ咲きの青春と言えるのではないだろうか！

30歳代

榎と野川と家出少女

山田智佳子さん

なんの不自由もなく円満な家庭に育った私は、世の中の厳しさに疎く、夢見がちな高校生だった。本と木と野川が心のよりどころだった。とりわけ木地雅映子著「氷の海のガレオン」を何度読み返したかは数知れず、本の世界がすっぽりそのまま心に入って、膨らんで、時に息苦しかった高校生活を生き抜くための救命胴衣となってくれた。自然に恵まれた環境の中、木にもずいぶんお世話になった。村山由佳著「天使の卵」に影響されたネーミングで、野川のほとりに立つひときわ美しい榎の木を『夏姫』と勝手に命名してよく登っていた。『夏姫』に登り、本を読む。パンをかじる。将来進むべく道についてぼんやりと考える――。

そんな日々に終止符が打たれたのは大学受験だった。私は遠くの町の大学に行きたかったけれど、両親は反対した。だから私は反抗の意を込めて家出をした。今思えばなんと浅はかで、恩知らずだったのだろう。行くあてもなく、リュックひとつで野川公園と武蔵野公園内を徘徊し、三日目に足にケガをして帰宅した。その時の母の顔を、いまでも覚えている。聞けば、高校の先生方も探し回ってくださったそうで、どこかの公園にいるに違いないと、的確な理解力を示してくださり驚いた。

遠くの町の大学に進学し、働いて、結婚して、子宝に恵まれ、小金井市に戻ってきた。今でも、ときおり『夏姫』によじ登っては、野川の風を楽しんでいる。